

# 鍾肇政の日本文に見える特徴について

## ——『苦雨戀春風』と周辺資料から——

高橋明郎

### 1. 導 言

2015年、第二次大戦後の早い時期に書かれた鍾肇政の情書が、張良澤・高坂嘉玲の手により『苦雨戀春風 青年鍾肇政初戀情書集』（以下「情書集」と称する）という形で整理・刊行された<sup>1)</sup>

鍾肇政は台湾の著名な作家である。民國14年（1925）生まれの鍾肇政は台湾文学史上多くの場面で重要な役割を果たした。創作者として膨大な小説、隨筆を著したのはもちろん、文学雑誌の編集者として数多くの後進に活躍の場を与えた。彼の生地である桃園縣は客家人の多数居住する地域であり、彼自身も客家系であることから、近年では「客家文学」のシンボリック的存在として強調される場面も多くなってきた。

こうした点以外に重要なのは、彼が戦後の台湾人華語作家の最初の世代であることである。この意味合いは、張良澤教授などがしばしば強調することである。文学史的に見て彼自身の作家としての位置は何かというと、日本統治時代に日本語で教育課程を終えながら、日本の敗戦によって統治者となった国民党政府によって日本語の使用が制限・禁止されて、作品の使用言語を中国語に切り替えざるを得なくなった中間世代であったということである。彼より下の世代は最初から中国語で教育を受けたため、そもそも言語転換の苦労は少なく、彼より上は日本語での創作経験が長すぎて、ほとんどが十分に華語に転換できなかった。鍾肇政はその中間にあって苦心の末華語への転換に成功した代表例

---

1) 張良澤・高坂嘉玲合編、鍾肇政原著及び監修、秀山閣私家蔵版、2015、台南

である。従って、彼の日本語は、統治者が構築した日本語教育の課程の成果である一方、それ以後の人生では、表現行為によって洗練化する過程も経なかったことになる。

鍾肇政は少なくとも成人期に至るまで、文章での使用言語は日本語でありながら、今日公刊されている作品は、当然華語で発表されている。だから公刊された文章からでは彼のそもそもの日本語での文章表現について窺うことは難しかった。今回の「情書集」は、日本文を残して編集されており、その意味で非常に意義深い存在と言える。

2014年4月から筆者は台南の国立成功大学台湾文学系で1年間研究生生活を送ったが、その際この鍾肇政の恋文の校訂を張良澤真理大学台湾文学資料館名誉館長に依頼された。筆者自身の作業は、具体的には印字されたものの怪しい部分をマニユスクリプトに当たって確認するというもので、誤読箇所や変換の誤りを正していったわけだが、その過程でチェックした彼の日本語の傾向というものを本論文にまとめることとする。

最初に莊華堂の整理した『鍾肇政生平大事記』<sup>2)</sup>によって、伝記的な面を予めメモしておこう。

民國14年(1925)1月桃園龍潭生まれ。民國17年(1928)4歳で台北に転居、歌仔戲の舞台や映画を見て台湾語を話し始める。民國20年(1931)台北市太平公学校に入学、日本語学習を開始、民國21年(1932)龍潭公学校に転校、客家語を学び始める。民國26年(1937)卒業、新竹中学に受からず民國27年(1938)私立淡江中学に入学、民國32年(1947)卒業、進学に失敗し大溪宮前国民学校助教となり、このころから和歌に興味を持つ。民國33年(1944)彰化青年師範学校に入学、情書にもしばしば名前が登場する沈英凱の勧めで世界文学の名著を読む。

民國34年(1945)師範学校卒業、学徒動員法により徴用され大甲に駐屯。終戦後帰郷。『三字經』や『百家姓』から中国文を学習し始める。民國35年(1946)教育業務の傍ら中文学習を続け大量の新聞を読む。この年の5月龍潭

---

2) 『鍾肇政口述歴史』付録, p 387, 唐山出版社, 2008, 台北

国民小学教員となり、漢語を一から学ぶ。民國36年(1947)台湾大学中文系に進むも聴力の問題もあり退学、小学校教員に復職した。そして民國39年(1950)に郷里の女性と結婚。最初の中国語文「婚後」を『自由談』に発表した。

当時台湾では、終戦後に『台湾新生報』(1945)『中華日報』、『自由日報』(1946)、『台湾文芸』、『台湾評論』、『台湾文化』(1946)『新生報』の『橋』副刊(1947)、『自立晩報』(1947)『国語日報』(1948)などの中文による新聞・雑誌が創刊されていくが、呉濁流の『ポツダム科長』が日本語で出版されたり(1947)、龍英宗が『中華日報』日文欄文芸欄編集長に就任する(1946)など、台湾人の日本語はなお活躍の場を保っていた。とはいえ、同時期楊逵が日本語での評論を数多く発表するも民國36年(1947)には拘禁されるなど台湾人作家の日本語での活動範囲は次第に狭められていった。民國35年(1946)に国語普及委員会が組織されて北京語の使用が国策として前面に打ち出され、その9月には中等学校での日本語使用が禁止されるなど、そもそも日本語を介した表現活動に未来は無いことがはっきりしてきた。

鍾肇政は何とか北京語での文筆活動に切り替えることに成功し、小学校教員から、東呉大学講師を経て『台湾文芸』社長、編集長となり、民國50年(1961)名作『魯水花』を発表、以後『濁流三部作』、『台湾人三部曲』などの著名作家としての道を歩む。

張良澤教授は情書集の前言で、これらの情書の学術的価値について社会学、言語学、文献学、文学上に分けて列挙している。このうち言語学上の価値として、日本統治50年の日本語教育の成果、台湾人の日本語表現の特色、台湾人と日本人の使用語彙の差異を知る意味で貴重だとしている<sup>3)</sup>

本稿は、このような意味を持つ情書に用いられた日本語の特色を記述することを目的とする。なお、文中敬称は基本的に省略させていただいている。

---

3) 『苦雨戀春風 青年鍾肇政初戀情書集』p14

## 2. 資 料

まず、使用資料について最初に述べる。最初に極めて重要な点を断っておく必要がある。それは本稿の典拠は、今回公刊された情書のみでなく、一部は非公刊の書簡資料にも亘っている点である。こうなるに至った理由を以下に述べる。

今回公刊された情書は264通に整理されている。ただし、筆者が初めに日文校訂作業に入った時点（2014年4月）では、550通以上の資料、すなわち原書簡にナンバリングしたものを元に高坂嘉玲講師が印字化したものと張良澤教授の中文対訳を段組みしたものが存在した。従って、本稿ではその550余通の資料を元に考える。

筆者の校訂作業と並行して真理大学の銭鴻鈞教授による配列替え、更に張教授による再配置が行われた<sup>4)</sup>

この間筆者は初校版をもとに校訂メモを取っていたのであるが、秋には公刊の形に近く整理されたものが出来つつあった。この時点で原書簡群の一部は、鍾肇政以外の筆者によるもの、或いは情書集としての進行に必ずしも関連しないものとして消えている。しかし上述の言語的特色の考究のうえでは、それらを特に除外する意味はないので、本稿では最終的に刊行版には載らなかった鍾肇政の書簡も合わせて利用している。

また、公刊に当たり、上記意義に配慮して、張教授は原文の日本語の誤りを、訂正を示す形で多く残しているが、しかしすべてが残ったわけではなく、公刊版では正規の日本語的記述に修正されている部分もある。これも本稿の狙いからして、原文資料をもとにすることにしている。

次に、原資料の状態について記しておく。用紙は原稿用紙、罫紙、反古紙、印刷物の裏面、紙片などが利用されている。また筆記具はインク、毛筆は無論だが、加えて赤鉛筆が使用されている場合が少なくない。おそらく鍾肇政の職場では非常に手近な存在だったからである（嘗てのやんごとなき方々の朱筆や

---

4) 最初の資料整理から公刊に至る作業過程は、『苦雨戀春風』p8～11に詳しい。

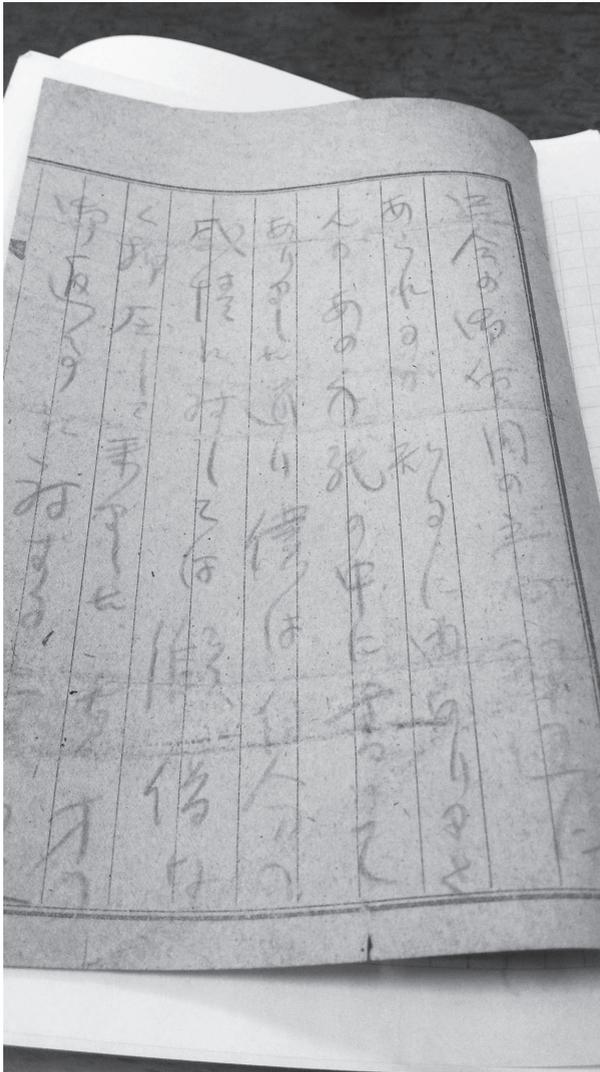


写真1 朱罫に赤鉛筆の大字で認められたもの

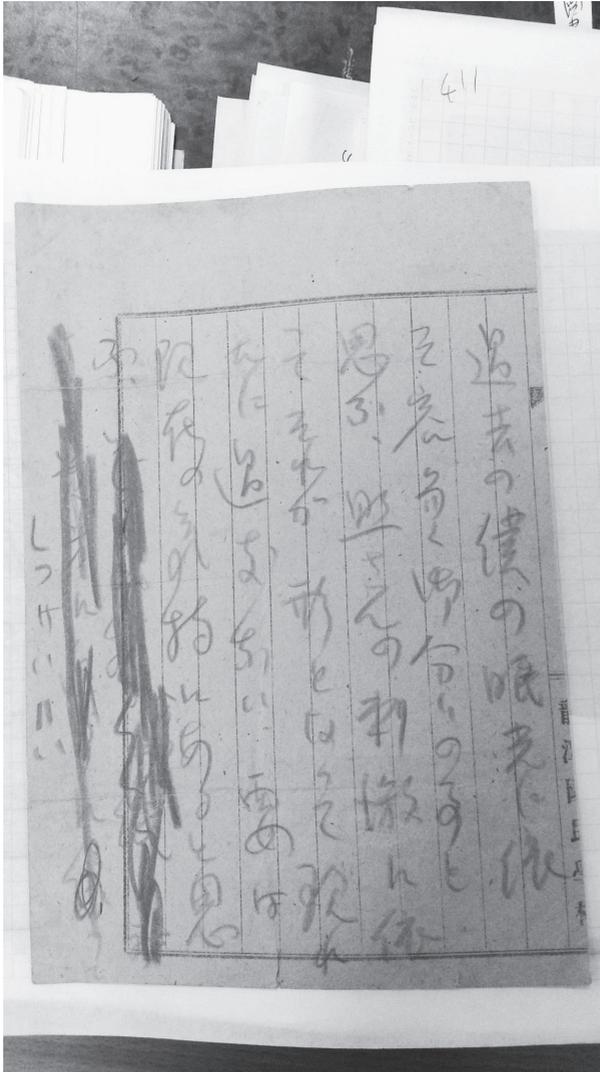


写真2 用紙, 筆記具は同様で, 鍾肇政自身が削除した部分を含むもの

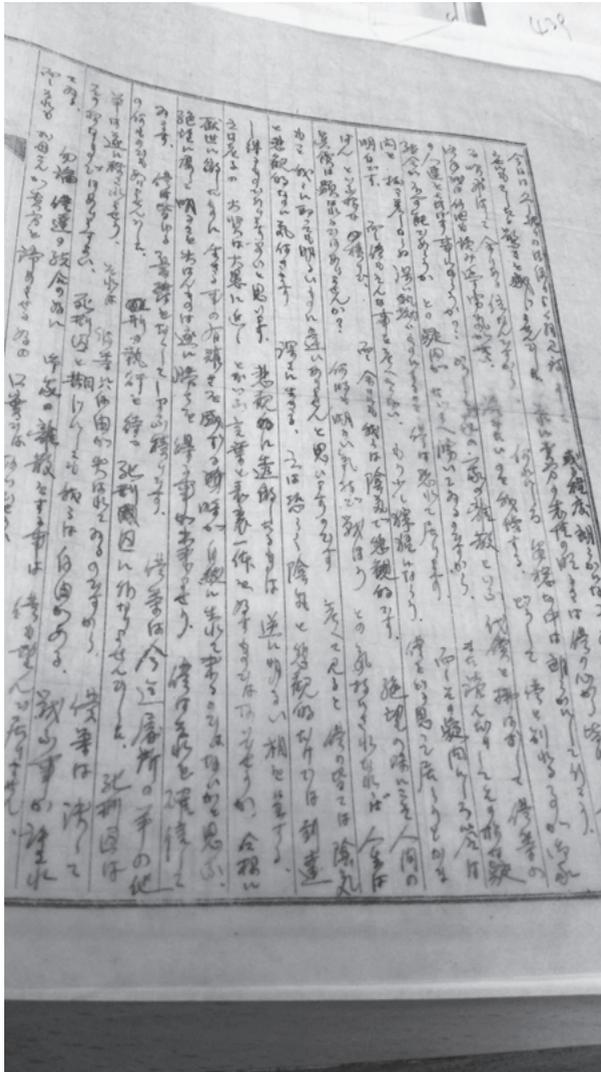


写真3 黒野, 1行に2行分詰めて小字で埋められたもの  
 (1~3いずれも真理大学台湾文学資料館張良澤教授蔵)

朱批は別にして、赤字の手紙は絶縁を意味したりしたものであるが、鍾肇政の場合、そうしたこだわりは無かったようである)。片面が既に使用されているもの以外は、表裏ともに書き込まれる場合も少なくない。インクがやや褪色してしまっているものや、汚損により判読不可能な部分も存在する。字は大きな字のものもあるが、特に長文のものは、逆に非常に細かな字で紙一杯に隙間無く記されている。

ほとんどは達筆な草体であるが、点の有無は明確に記されており、また用紙がきれいな状態のものでない場合も、用紙上に例えば濁点とまぎらわしいような汚れは存在しない。このことは、今回後に期す濁点関係の筆記を見る上で顧慮の必要がなかったということであり、明記しておきたい(残念なことに、今日出版されている日本統治時代の台湾人作家の全集に収められた日本文の中には、原印刷物の汚れを濁点や点と判断して活字化してしまったケースがある)。

### 3. 鍾肇政情書の日本語

それでは、実際に資料上の日本語の特色を拾っていくことにする。

感情に任せて書かれた部分や、時間をかけて完成させたものが混在するが、普段の日本語としては問題ないレベルにあるのは当然であるし、それ以上の基準で文章の構成や用語を云々するのは、基本的に非公開を前提とした個人の文章である以上意味がない。ここでは、全体的に一定のレベルに達している日本文であるということは前提として、通常用法との差に注目して記述していきたい。

なお、以下の表の中では、公刊版にも残っているものを前に置き、公刊版から外れた資料については、表右欄で元 NO を付した<sup>5)</sup> また上述のように公刊版では完全に原型を消して訂正されているものについても、以下では原資料の表記に基づいている。

---

5) この原資料全体は公刊されていないが、現在も張良澤教授の保管下にあるので、これを付記することにより、後の研究者による現物での根拠確認を容易にするため注記した。

また、「情書集」では、鍾肇政は他人の発言をほとんど間接話法で記述しているため、彼以外の語法が混入する性質の資料ではないことも付言しておく。

## 1) 漢字選択

ここでは明確に誤った使用のもののみ例示した。日本でも明治以降第二次大戦後の新国語表記に至る期間、漢字の当て方はかなり自由であり、それは特に漢学の素養深い作家、例えば漱石がいい例だが、その文体の大きな特徴となっている。当然ながら当用漢字という区分以前に教育を受けた鍾肇政がこうした自由さを持つのは、むしろ当然である。例えば22 信に「文学者の畫く女性は」という記述がある。今日の常用漢字では「畫く」は絵画以外では「描く」を用いるところであるが、こうしたものは、例示に含めなかった。あるいは、77 信の「椽の下の力持ち」は語義的には「椽の下の舞」から来ているので誤用と断じられないものの、本義によったというより字の誤りだった可能性が高い。

NO	原資料	修正例	元 NO
23	まだ眠っている始末	眠っている、または、寝ている	
31	それに増さる	勝る	
31	提拱	提供	
77	椽の下の力持ち	縁の下の力持ち	
78	僕の言動に返して	反して	511
86	杜切れ、	途切れ、	
118	坦白な気持ち	淡白な	464
137	耳のことに付いては万策を考じた方が	就いては、講じた	471
137	法庭に立った	法廷に立った	471
150	あの写真、去年履歴表の必要で大溪で撮ったもの	大溪で撮った	
150	太事	大事	

165	固性	個性	303
168 (242)	御和, お和	御菜, お菜	302 (246)
177	情濃やかだった	情細やかだった	
192	首尾乗乗	首尾上々もしくは上乘	313
212	固々	本本, 元々	549
213	但なる	単なる	
220	不思義	不思議	
226	課程である	過程である	
226	奮激	憤激	
226	読み反して	読み返して	
240	言語同断	言語道断	
242	お和	お菜	246
253	十時と二次のバスとも待ち呆け	十時と二時のバス	
259	〇 時件	〇 事件	
264	宛はないが。	当てはないが	
260	僕の胸がなんだか一抹の暖みが 流れる	僕の胸に <u>な</u> んだか一抹の暖かみ が	261
	最大もらさず	細大もらさず	30
	言動に返して	反して	76
	君に合ひたいが, 分且の熟する 時期に	会ひたい, 文且	151
	伍して生ける	伍して行ける	303
	本か僕だと	元が僕だと	303
	僕は反りみたい	僕は省みたい。	348
	抽出しが空けられ	開けられ	492
	無理を推して	無理を押して	555

概ね単純な書き損じであるが, 「反」の「返」への取り違えは例示部分以外も共通して見受けられる。また, 漢字の運用は, 後でも触れることになるが,

明治の文人たちにとってかなり自由であり、例えば「法庭」は今日の華語でもこの表記で、漱石もこちらを使う。従って鍾肇政の一部の語については、吸収した日本文学作品の用字の揺れの流れでの運用という見方ができるだろう。

## 2) 濁点の誤用・省略

これは現在も中国人の日本語会話でしばしば見られる現象で、そもそも北京語で濁音区別を意識しないことに関連するが、台湾語にはかなり明確な濁音が存在し発音上区別されているので、中国語圏の問題に単純に帰することもできない。

本来濁音であるべきものが清音に表記されているものは「感する(感ずる)」「出来得べくんは(出来得べくんば)」「心つくしの款待(心づくしの款待)」「逢はずしまひ(逢はずじまひ)」などである。一方清音であるべきものを濁音で表記してあるのは「何を感じられそうです(何か感じられそうです)」「貴方が持ちこたへられるか否がに依って」「夢圓がなれ(夢圓かなれ)」「けしかけて(けしかけて)」などである。敢て特徴的なことを言えば、前者はハ行、サ行に多く、一方後者はほぼカ行に集中し、ハ行はほぼ無いことであろうか。

またハ行は破裂音と混同している箇所が、少ないとはいえある。即ち、「一人ぼつねんと(一人ぼつねんと)」「眼をパチクリ(パチクリ)」などである。

また「つくづく」は公刊本では修正されているところとそうでないところがあるが、原文はほぼ例外なく「つくづく」と表記されており、鍾肇政がこの単語をこの音で使用していたことになる。

まず不要な濁点が付加されたものの例である。

NO	原資料	修正例	元NO
70	只見る以外に何か感じられさうです	只見る以外に何か感じられさうです	395
78	そうかと云って	そうかと云って	511
226	貴方が持ちこたへられるか否がに依って	持ちこたへられるか否かに依って	226

256	夢圓がなれ	夢圓 <u>か</u> なれ	255
	腰がけ	腰 <u>か</u> け	29
	二夜とも何回が云った	何回 <u>か</u>	213
	幾度が	幾度 <u>か</u>	321
	幾らが僕でも知っています	幾ら <u>か</u> 僕でも	391
	忘却の彼方が	忘却の彼方 <u>か</u>	488

次は、逆に有るべき濁点が欠落している例である。

NO	原資料	修正例	元 NO
70	感ずる所	感 <u>ず</u> る所	
114	僕の何か疑はしいと云ふのでせうか	僕の何 <u>が</u> 疑はしいと	386
115	感ずるところあり	感 <u>ず</u> るところあり	388
135	どんな考へが分からない	どんな考 <u>へか</u> 分からない	391
146	出来得べくんは	出来得べく <u>んば</u>	
173	なんて書きやかかって	なんて書きや <u>が</u> って	331
205	息つまる思ひで読んだ	息 <u>づ</u> まる思ひで読んだ	204
221	嫁く勿れ	嫁 <u>ぐ</u> 勿れ	221
254	心つくしの歓待	心 <u>づ</u> くしの	255
	系統つけたといふ二つ事だけでも	系統 <u>づ</u> けたといふ二つの事だけでも	29
	逢はずしまひ	逢 <u>は</u> ず <u>じ</u> まひ	235
	恐るへき	恐る <u>べ</u> き	235
	疑問がたゝさへ湧いてくる	た <u>ゞ</u> で <u>さ</u> へ	438
	名かふまっていますう？	名が <u>ふ</u> るっていますう？	456
	挟ます	挟 <u>ま</u> ず	493
70, 247 etc 多用	つぐつぐ	つ <u>く</u> づ <u>く</u>	395, 493, 548 etc

不正確な発音がもとになっていると思われるものは下の通りである。

NO	原資料	修正例	元 NO
	ほ <b>っ</b> ばらかして	ほ <b>っ</b> ば <b>ら</b> かして	67
	独 <b>り</b> ほ <b>つ</b> ねんと	ほ <b>つ</b> ね <b>ん</b>	129
	眼をバ <b>チ</b> クリ	パ <b>チ</b> クリ	131
	ち <b>さ</b> い時から	ち <b>ひ</b> さい時から	145
	少 <b>し</b> す <b>ず</b>	少 <b>し</b> づ <b>つ</b>	498

ほぼ濁音と破裂音の混用で、前半に示した濁音の誤用を加えると、濁音は一つの大きな障壁であつたらしい。

### 3) 活用の誤用

動詞、形容詞、形容動詞など用言の活用は、比較的多くの書き違いが見られる。概ね三種にこれをまとめることができる。

第一は活用形自体を誤っているものである。「ならうがならうまいが」は「ならうがなるまいが」であり、「身を委ぬ時」は勿論連体形の「委ぬる時」とせねばならない。「神経を疲らした」は「疲れさせた」, 「見せてくれたであるませう」は「見せてくれたであります」, 「思ひ出でるまま」は「出づるまま」, 煩瑣なので後は表に譲るが、この種の書き違いは少なくない。また、「かも知らない」「知ら**さ**ない」などは、文語文法の活用を取ったものである。

次に不要な助動詞や助詞の添加が見られる。「渡せられなかった」は「渡せなかった」もしくは「渡されなかった」と記述されるべきものである。「精神に支配されません積りだから」も「精神に支配されない積りだから」である。「予想し得られる」は「予想し得る」, 「思ひだしてくれらる」は「思ひだしてくる」である。

最後に逆に活用語尾が省略されてしまう場合である。「書き連ねばならない」は「書き連ねねばならない」「失なせた」は「失はせた」である。

NO	原資料	修正例	元 NO
94	補充勉強したらいいとも勧めたいし	補充勉強したらいいとも勧めたいし	
126	何一つ貴方に強ひれないのですから	強ひ <u>られない</u>	532
232	忘れなれない	忘れ <u>られない</u>	
254	逆旅に身を委ぬ時	委ぬる時	255
	思ひ出でるまま	思ひ出 <u>づ</u> るまま	3
	広がれなくても	広が <u>ら</u> なくても	11
	見せてくれたであるませう	見せてくれたで <u>あり</u> ませう	93
	覚悟をして置かねばなるまい	覚悟をして置か <u>ね</u> ば	226
	～状態に入るに違はないから	入るに <u>違</u> ひないから	226
	如何な気持ちの	如何なる	226
	随分神経を疲らした	神経を疲 <u>れ</u> させた	439
	一寸融通がきけたのです	きか <u>せ</u> られた、もしくは、き <u>い</u> <u>た</u>	440
	破れ捨てない	破 <u>り</u> 捨てない	555
	云ほう	云はう	
	うつぶして	うつぶ <u>せ</u> て	128

また possible の表現についても不要な重複などずれがある。

NO	原資料	修正例	元 NO
64	渡せられなかった	渡せ <u>な</u> かった、もしくは、渡 <u>さ</u> れ <u>な</u> かった	463
78	波瀾は半減されることも予想し得られるです	予想し得るのです	511
	構えてくれられたら	構 <u>へ</u> てくれられたら	438
	何故に渡せきれなかったか	渡 <u>せ</u> なかったか	532

## 4) 助 詞

助詞については、相当な箇所不自然なものを指摘することができる。

助詞の誤りは3種である。

第一は、不要な助詞が書き加えられる場合である。

NO	原資料	修正例	元 NO
31	而し満足させてくれる人 <u>か</u> に逢ふ迄は	満足させてくれる人に逢ふ迄は	357
31	若い人達の許りの集まりである	若い人達許りの集まりである	357
40	私の心 <u>に</u> は貴方でもう一杯なのです	私の心は	377
143	今 <u>で</u> 思ふと	今思ふと	
	結論に到達する <u>の</u> 外は無かった	結論に到達する外は無かった	565
	私は疑を打消したい <u>の</u> あまり	打消したいあまり	498

終止形に「の」を付加してしまうのは、今日でも外国人の日本語でよく目にするものである。同じ形は以下の第2例で欠落が生じる位置としても少なくない。

第二に、助詞の欠落で、これは助詞が過剰の場合より、かなり多く出現している誤りである。主語を受ける格助詞の欠落が多く、準体言助詞も無視される場合が少なからず見受けられる。

NO	原資料	修正例	元 NO
1	何も無いでしたら	何も無い <u>の</u> でしたら	343
3	知らさないが良いと思ひます。	知らさない <u>の</u> が	
31	本島人極度の差別と圧迫を加へられていた非常時	本島人 <u>が</u> 極度の～	
31	西洋文学始め心境がどれだけ	西洋文学 <u>を</u> 始め	357
70	一寸暇あると	暇 <u>が</u> あると	395
113	どうしてはっきり書いて頂けないでせう？	頂けない <u>の</u> でせう？	522
155	今年中治らなければ	今年中 <u>に</u> 治らなければ	321

175	何日までお渡しすれば良いか	何日まで <u>に</u>	452
212	斯くせしめた <u>で</u> せうか	斯くせしめた <u>の</u> でせうか	549
221	家の種々事情を	種々の事情を	221
224	行き違ひ <u>な</u> った	行き違ひ <u>ひ</u> になった	224
226	毎晩でもお誘ひした <u>か</u> った。話 なく <u>も</u> あつても	話 <u>が</u> なく <u>も</u> あつても	226
241	諦めくれませうから	諦めてくれませうから	
242	と云へる <u>で</u> はなからうか	と云へる <u>の</u> ではなからうか	
247	次の言葉に確信 <u>つ</u> かない	確信 <u>が</u> つかない	548
251	疑問がたゞさへ湧いてゐる	疑問がたゞでさへ湧いてゐる	252
	僕は何も良い方にと解釈してしまつて	何 <u>で</u> も良い方にと	11
	無理に僕に押しつけたとでも解釈のしようのない	押し付けたとでも <u>しか</u>	11
	悪いことであると同じである	悪いことである <u>の</u> と	11
	僕を愛してゐる <u>だ</u> から	愛してゐる <u>の</u> だから	24
	彰化で男性的な生活は	彰化 <u>で</u> の男性的な生活は	29
	毎年の年末に浮かぶ <u>は</u>	浮かぶ <u>の</u> は	29
	臆病だつたと結論に結局は到達してしまふ	だつたと <u>の</u> 結論に	30
	何も無い <u>で</u> したら	何も無い <u>の</u> でしたら	60
	せねばならなかつた <u>の</u> せうか	せねばならなかつた <u>の</u> で <u>せう</u> か	66
	一寸暇 <u>あ</u> ると	一寸暇 <u>が</u> あると	69
	高慢な <u>な</u> である	高慢な <u>の</u> である	72
	誰も経験しましたが	誰も <u>が</u> 経験しましたが	75
	治るとも治らん <u>も</u> 一切無関心	治るとも治らん <u>と</u> も	85
	何も云つてくれた	何 <u>で</u> も	93
	僕自分鼻をふさい <u>で</u>	僕は <u>自分</u> で鼻を	104
	どうしては <u>は</u> っきり書いて頂けない <u>で</u> せう	書いて頂けない <u>の</u> で <u>せう</u>	110
	機会がない <u>で</u> したら	機会がない <u>の</u> でしたら	132

	何ろ生徒を叩いて	何 <u>し</u> ろ生徒を	143
	今年中治らなければ	今年中に <u>治</u> らなければ	151
	どう僕に解釈せと	どう僕に解釈せ <u>よ</u> と	151
	僕去ったら	僕が <u>去</u> ったら	157
	～と云ふ首をかしげましたね	～と云ふて <u>首</u> をかしげましたね	235
	行くことにしてくれたでした	行くことにしてくれた <u>の</u> でした	235
	そして祖父母なる事	そして祖父母 <u>に</u> なる事	235
	何故二人とも書かないであらう	書かないのであらう	235
	運命づけられゐると思った	運命づけられ <u>て</u> ゐると	246
	永久忘れ得ない	永久に忘れ <u>得</u> ない	378
	僕去ったら	僕が <u>去</u> ったら	427
	僕を愛してくれてゐるだから	愛してくれて <u>ゐる</u> の <u>だ</u> から	498
	僕自分の可愛い弟の為に	僕は	498
	僕笑ひたいのを我慢しているのだよ	僕は	498
	彼僕に種々忠告したのだった。	彼は <u>僕</u> に	519

第三は不適切な助詞が選択されている物である。

NO	原資料	修正例	元 NO
31	照子さんが貴方の真の心の友である <u>の</u> は夢にも思はなかった	照子さんが貴方の真の心の友である <u>と</u> は夢にも思はなかった	357
50	客観的 <u>の</u> 態度を以って読んでいない	客観的 <u>な</u> 態度	545
52	世の中が <u>何</u> をならうと勝手になりやがれ	何 <u>と</u> ならうと	561
60	原因が貴方の方に大部分あるのではないか <u>を</u> 考へて	原因が貴方の方に大部分あるのではないか <u>と</u> 考へて	479
94	皆に笑は <u>せ</u> た	皆を笑は <u>せ</u> た	
234	私は貴方を望んだのは	私が貴方を望んだのは	234
238	今で <u>考</u> へると	今にな <u>っ</u> て考へると	496

260	冷たい世の中に対するに僕の胸がなんだか一沫の暖みが流れる	僕の胸に	261
	山家集は斯くして最も親しい友の一人となったのも	山家集が	29
	心の友であるのは夢にも思はなかった	あるとは	30
	墓場に入って	墓場に入って	30
	明日は愉快で過ごして下さる事を	明日は愉快に過ごして	45
	何ものが美しく	何もかもが美しく	52
	紙を取り出されてペンが手に握られてしまった	紙が取り出されて	492

### 5) 促音

促音の問題は、おそらく通常これらがどう発音されていたかの手がかりである。不要な促音を加えられているものもあるが（「さりとって」など）、問題のある個所のほとんどは「よかったて（よかったって）」「うかり（うっかり）」など欠落があるものである。

NO	原資料	修正例	元 NO
40	うかりすると	うっかりすると	37
57	兄弟の愛ていふやつは	愛っていふやつは	506
63	世の中て	世の中って	465
70	成程踊りてこんなものか	成程踊りって	395
76	ほうとして	ほうっとして	
82	当り散らす法てないでせう！	当たり散らす法って	553
84	叔父恐ろしいて云はれましたが、どうかしたのですか。	伯父が恐ろしいって云はれましたが、	551
158	医者て或は年数をやると	医者って或る年数をやると	324
174	一その事云々	一っその事	421
185	お化粧よかったて	お化粧よかったって	327

185	美しく見えたて	美しく見えたって	327
200	焼いてしまて…	焼いてしまって	
255	さりとして	さりとして？	
	地平線と墓石と落日の三つに依 て	地平線と墓石と落日の三つに 依って	357

## 6) 語尾の欠落

次に、語尾の本来あるべき字が欠落するケースがある。最も顕著にみられるのは、「もう」のほとんどが単音節の「も」と記載されていることである。公刊本では、このため逐一「も(う)」の形で記述されている。ただし、「も一つ」「も一度」などは、口語として使われることがあるので、これらは単純に誤用誤記とは言えないかもしれないが、しかし、「も やめます」や「も 目的地は近い」など、口語でも短縮できない場合に於ても「う」字が欠落していることから察すると、「もう」という単語を誤って記憶していたとみる方が自然である。

NO	原資料	修正例	元NO
57	も やめます	もうやめます	506
70	も一度		395
78	彼はも性が固定してゐる	もう	511
226	之はも前に書いた	もう	226
226	僕二人の運命は決定されます	僕ら二人の	226
254	過ぎればも目的地は近い	もう	255
	感想みたなものでも	感想 <u>み</u> たいなものでも	30
	も一つ		121
	も力になってあげられない	もう	417
	も少し	もう	553
	も一冊に	もう	569

副詞の語尾も落ちがちである。

NO	原資料	修正例	元 NO
5	非常愉快です	非常に	462
153	永久 忘れ得ない	永久に忘れ得ない	
241	又, 一しょなれたとしても	また一しょになれたとしても	
	確か立派です	確かに	72
	敢へ問ふまいし	敢へて	95
	笑顔にいくら心は慰められて	いくらか	235

## 7) 送り仮名

まず一種は漢字を名詞の訓と動詞の訓を混用して意識しているものである。このため似たものに、漢字に相当する読みの部分の誤解。「何一」は「一」を「ひとつ」と読んで「つ」を送らない。

元 NO 82 の「決して」は「決」自体を「きめ」と読む。動詞・形容詞の活用部分を現在は送るが、資料では基本的に略される傾向にある。「漏さず（漏らさず）」「少らざる（少なからざる）」「思はしたものの（思ひはしたものの）」

旧仮名使いの時代には、今日のように厳密でなく、ほとんどが誤りではなく、むしろ当時の日本語の実体に近い。ただし、送り仮名の欠落では、「而」はほぼ全て逆説の「而し」の意味で使われている。「而（し）」や「少（なか）らざる」は、「情書集」でしばしば登場する語彙なのであるが、一貫してこの表記であるのは、特徴的である。また「何」字に続く部分は下の表に含まれるものも含め、表記上読みの変化に頓着せずに一字で済ませていることが多い。

NO	原資料	修正例	元 NO
10	死ねばならない	死なねばならない	
31	引かへ	引きかへ	
31	而	而し	357
31	出来事を最大漏さず	出来事を細大漏らさず	357
40	夢にも思なかった	夢にも思はなかった	377

41	汚しく	汚らしく	376
179	横はった	横たはった	175
186	静って	静まって	455
201 (205, 218)	少らざる	少なからざる	
210	諦切れない	諦めきれない	210
210	実行の幻想に捉はれて武者振るにする事も	実行の幻想に捉はれて武者震いする事も	401
226	必ずも	必ずしも	1
226	話なくとも	話さなくとも	
238	うんと笑してくれました	笑はして	240
251	行先々で	行く先々	252
257	僕、今何一判断力を持っていない	何一つ	255
259	書き連ねばならない	書き連ねねばならない	
259	僕は恐る	恐れる	533
	お知せ願いたい	お知らせ	67
	思はしたものの	思ひはしたものの	47
	決て	決めて	82
	仕様も無ったのでした	無かったのでした	79
	何回もさい思はしたものの	さう思ひはしたものの	488
	盛に	盛んに	303
	何ろ生徒を叩いて	何しろ生徒を叩いて	143
	ひとり横り	ひとり横たはり	357

「武者振るするにも」は「武者振するにも」でも可能だが、既に「る」を送っている以上「武者振るい」とあるべきである。

## 8) 華語的言い回し

日本語で常用される語彙から外れるものを幾つか例示する。

ただし、これらの語句については、二つのことを念のため記しておきたい。

「高慢的な」といったものに含まれる「的+な」という言い方自体は、通常の用法であるが、その場合「的」で受けられる語には、通常使用されるものとそうでないものが有り、ここに挙げた「高慢」や「皮肉」は通常の語感から言うと少し外れる。また「一ヶ年」「三ヶ月」は通常の言い回しだが、「半ヶ年」「半ヶ月」は華語としては常用されるものの、日本語の通常の文章では「ヶ」を入れない。これらは、言葉の偏差が華語方向に振れているものではある。「想到」という単語も同様である。ただし、鍾肇政自身は、基本的に当時は北京語学習を開始したばかりの日本語話者であり、華語の直接の影響と断ずることはできない。

一方「黒暗」「双親」「日子」は今日では通常「暗黒」「両親」「日(または日々)」を使うところである。これらは本来、日本で言う所の「漢語」の語彙であるので、漢籍を読み込んだ明治・大正の文人たちの日本語の文章の中には発見しうるものである。(例えば露伴、鷗外、漱石、一葉、谷崎など)日本文学のみでなく広く文学作品を(日本語で)読みあさった鍾肇政の語彙の中では、自然なものだったと言えるだろう。

NO	原資料	元 NO
31	黒暗の墓場に入って	
31	二か月くらいの日子を要しました	
77	双親の反対	
137	半ヶ月もたっている	471
218	疑懼	459
248	半ヶ年来	
259	それが貴方の口で吹はれて御良人の耳に入る事を想到して	533
	高慢的なである	72
	それが老実だと云はれる	456
	皮肉的な気持ち	565

ただ、上述のように明治・大正期間の文芸的日本語では、漢文の影響で華語は混入してくるので、この項は誤用としてではなく、あくまで参考としてあげた。

## 9) 日本語としてのその他の誤用

まず単語の誤用例を示す。

NO	原資料	修正例	元 NO
31	無限の可能性がある	可能性がある	30
151	今以外の発展は	今以上の	
212	愉快的旅行を持たれる様 希望して止みません	旅行となります様？	549
217	憂きを紛らはして居ります	憂さ	547
	どの程きくか	どの程度	56
	当該する病気が	該当する病気が	172
	暫くで終わりましたのですが	暫くして	209
	しかしどの程が	どの程度、どれ程	506

他に単語の誤用としては、「レター」、これは公刊本では修正されているが、原文はすべて「レータ」である。

また丁寧な言い回しを取ろうとして、日本語の表現からずれてしまったものとして、次のようなものが挙げられる。

NO	原資料	修正例	元 NO
64	精神に支配されません積りだから	精神に支配されない積りだから	463
251	明るいものに違ひありませんと思ひますのです (633)	明るいものに違ひないと思ひます	
	一月位した頃でしたと思ふ。	一月位した頃(でした)と思ふ。	498
	その近くの頃でしたと覚えてゐる	その近くの頃だったと覚えてゐる	565
	誤りであることを知ってくれるでせうと思ひます	知ってくれる(だろう)と	532

また、動詞の誤用として記述の活用の他にも通常の日本語の使用とは異なる場合もある。公刊版は「剣突」は剣幕に直されているが、おそらく誤って書かれたのは「剣突」ではなく、対応する動詞の活用である。

NO	原資料	修正例	元 NO
107	明月も一度出る様に	来月も一度来る様に	442
238	ひどい剣突を食はれた日 (10・496)	食はされた <sup>6)</sup>	240 (496)
259	物分りが無い	物分りが悪い	533
259	両様の思ひかたが相克してゐるのである	思ひ、もしくは、考へかた	533
	裏切り以外の何も無い	裏切り以外の何ものでも	246
	正直が返ってをかしいのならしい	反ってをかしいものらしい	519
	恐れ怖る。	恐れる	554
	思ひ想つてゐる	思っている、もしくは、想つている	554

句の上の誤りは、「物も余り考へたくない積りです」は、「考へたくない」で止まるところである。「愉快的な旅行を持たれるよう」は「愉快的な旅行となりますよう」「知ってくれるでせうと思ひます」は「知ってくれるであろうと」。「でした」の使い方も少しずつれていて、広く丁寧な言い回しとして使っているが、「暫くで終わりましたのですが」は「暫くして終わったのですが」「その近くの頃でしたと覚えている」も「頃だったと」が自然な文章である。

「真の心の友であるのは夢にも思はなかつた。(真の心の友であるとは)」「今で考へると (今になって考へると)」「愉快で過ごして下さい (愉快に過ごして下さい)」「胸がなんだか一沫 (沫) の暖みが流れる (胸になんだか)」「感想みたなものでも (感想みたくないものでも)」など、日本語の流れとして不自然な部分も見られる。

動詞の誤用としては43信「明日の遠足を愉快に暮らされるよう」は「過ごされるよう」であるべきであるし、「家で転んで」いるのはやはりおかしく、「寝転んで」でなくてはならない。

6) 公刊版では、ここは「ひどい剣幕を食はされた」に修正されている。

#### 4. 鍾肇政の日本語写作

以上、鍾肇政情書及び幾つかの書簡に見られる日本語について記述してきた。日治時代の台湾人共通のものであるかは、これのみで断じられないという前提で、鍾肇政の当時の日本語のレベルを考えてみよう。

彼の書簡上に見られる日本語の基本は口語であり、「といふても」といった言い回しが稀に挟まる以外は、句のレベルで文語的なところは非常に少ない。一方、過度に口語的な言い回しも絶無ではない。例えば15 信の「行っちまひました」「しかし癩だね」、228 信の「それや影響して居りませうが」などだが、鍾肇政の文章の中では決して基調ではない。また3 で見たような瑕疵はあるものの意味が不明になるほどの混乱はほとんど無いと言える。

この日本語が学校教育だけで生まれた成果でないのは無論である。

この日本語を使ったのは、次のような条件の人物である。

最初は公学校に入っているが、中学校、師範学校と学校教育を受け、日本語を介して比較的高度な学問をしていること、第二次大戦後台湾大学に入ったことから分かるように、言語能力以外の知的素質も極めて高いこと（途中の進学過程で何回か挫折はしているが）。非常に多くの文学作品を日本語で読んでおり、和歌にも関心を持ち日本語の文芸的な語彙も豊富なはずであること。父親も教育者であり、学習について背景があったと見られること。これらを踏まえて、他の台湾人や、一般の日本人の日本語との比較が進められるべきであろう。

しかし、日本統治時代の学校教育課程に乗って意欲を持って学習した場合、日常の日本語すらが相当高いレベルであったことも分かる。

50 年の日本統治時代を経験した台湾は、国語としての日本語教育が続けられた結果、統治時代の最後の時期、日本語を操る台湾人の割合は高かった。そうしたことを歴史の記録や統計でしか知りえない今日の我々は、日本人と全く同等の日本語を話し書いていたとナイーフに信じてしまいがちであるが、やはり注意して考えなければならない。

日本統治時代から、幾つかの台湾での日本語についての報告は既にまとめら

れていた<sup>7)</sup>。また、当時台湾人によって書かれた日本語の作品、記事（概ね 1920 年代以降の話であるが）も、資料である。ただし、作品として出版されたものは、まず作家の推敲の上に編集者や同人のコメントも反映されたものであって、そもそも日本語力がどの水準にあるかを直接示すものとは言えない。その意味では、個人の日記や書簡の日本語は、日常的な言語レベルを知る上での参考になる。残念ながら今日となつては、系統的にそれらを調べるのが難しい以上、今回ある程度まとまって公刊されたのは貴重なことである。

---

7) たとえば、寺川喜四男「台湾に於て使用される國語の複雑性」（『日本語』 vol. 2 - 3, 日本語文化協会, 1942), 寺川喜四男「共榮圏日本語の訛音の問題 - 台湾に於ける実例を中心として」（『國語文化』 vol. 4 - 2 國語教育協会, 1945), 『文芸春秋』編集部「外地の日本語問題を語る」（『文芸春秋』昭和 14 年 12 月）